

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

昔話に、「わらしべ長者」というものがある。

昔、貧しい男がいた。男は観音さまに富を授かるよう祈願した。すると、最初に手につかんだものを大切にせよとのお告げがあった。男が最初に手にしたのは何のとりえもないわらしべ（わらの屑）であったが、お告げを信じてこれを捨てずに持ち歩いた。

飛び回るアブをそのわらしべでしばって持ち歩いたら、道行く子供がそれを欲しがったので、その母親が持っていたミカンとわらしべを交換した。すると、どがカワいて水気のあるものを探していた商人と出会ったので、商人が持っていた半端の反物とミカンを交換した。

次には旅を急いでいるのに、馬が倒れてしまった武士と出会った。そこで、その反物と道に倒れた馬とを取り換えた。幸いにも、馬をカイホウしたら元気になった。馬を連れていけると、これから旅に出るため馬を欲しがっている人に出会い、馬と引き換えにその人の屋敷に住んだ。ところが、旅人はいつまでたっても帰らなかったで、屋敷は男のものになり、男は裕福になった。

「わらしべ長者」の物語では、特段の努力をせずにただ道を歩いてただけで、つまらないわらしべが最後には高価な屋敷に化けたという、男の驚くべき幸運に注目が集まるようだ。実際、「わらしべ長者」をキーワードにインターネット検索をしてみると、少ない元手で楽をして大もうけというたくいの話が山ほど出てくる。

^A話に面白みをつけるにはこれでもよいかもしれないが、この点に気を取られてしまうと、「わらしべ長者」は実直な勤労の美德と価値を否定する、子供には有害な話とみなされかねない。経済学者としては、「わらしべ長者」が労せず大もうけの意味に解釈されるのは大変残念なことだ。

なぜなら、「わらしべ長者」は、経済学の視点で見ると非常に興味深く、有害どころか親子でじっくり味わうべき話だからだ。ここには、自発的な取引によって経済的な利益が生まれ、さらに取引に参加したすべての人たちは利益を受け取ることができる、すなわち^B交換による経済学的価値の創造という、教科書の第一章に出てくる経済の基本原則が美しく表現されている。

自発的交換による価値創造の原則は簡単明瞭である。自発的な双方の合意のうえで交換されるためには、交換に応じる双方にとって、交換前よりも交換後の状態の方が好ましいものでなければならず、^Cその差がまさに交換によって得られた価値にほかならない。

話に現れる取引を振り返ると、断ろうと思えば断れるものばかりだったから、話の中でももちろん^Dこの原則は成り立つ。わらしべを家に変えた男が大いに利益を得たことは言うまでもないが、ほかの人たちも利を得ていることを忘れてはならない。

子供にとってはミカンよりはわらしべのおもちゃのほうがはるかに魅力的なものだったから、ただのミカンでとても面白いものを入れたと喜んだはずである。反物商人も、売れるかどうかわからない余分な着物よりは、ミカンでのどをウルオすほうがはるかに良かった。死にかけている馬を手放して新しい着物

をもらった人は、良い取引をしたと感じたはずだ。旅に出なければならぬ人にとっては、家よりも馬のほうがはるかに貴重なものだったはずである。

このような取引からの利益は、物々交換の世の中ゆえに起こることではなく、金銭を使う現代経済でも同じことであることにも注意しておきたい。たとえば、男は千円でわらしべを売り、その千円でミカンを買って話を書き換えればよい。つまり、^E特定の取引に貨幣が媒介するかどうかということ自体は問題ではないのだ。

^Fより本質的なのは、専門用語で言う「市場の非完備性」ということである。つまり、登場する人々がそろって共通に取引できる場が備わっていないという点だ。仮に、物語に登場する人々が一堂に会して、さてお互いに物を売買しましょうということになったら、^Gわらしべを持った男が屋敷を手にする可能性はほとんどない。おそらくは、屋敷を持っている人が、馬を買って取ると提案したであろうし、そのほかさまざまなシナリオを考えても、なかなかわらしべには出番が回ってこないのである。

したがって、わらしべを持った男が大もうけできたのは、これらの人の間では直接に取引できる場が完備しておらず、また取引を媒介できる人物が彼しかいなかったからである。言い換えれば、^Hこれらの人たちの間に眠る経済学的価値を引き出すことができるのは、わらしべの男しかいなかったからだ。そういう役割を^d二つした結果、男はもうけるべくしてもうけたのである。

それでは、男がそのような役回りを運だけで手に入れたのだろうか。私はそうは思わない。なぜなら、話の中で男は少なくとも二度にわたり、無視できない重要な経済活動をしているからだ。

第一に、ⁱわらしべにアブを結びつけたというところだ。確かにわらしべとアブはたまたまた手で手に入ったものかもしれないが、それらを結びつけたことで男はおもちゃを生産したのである。たとえ原価がゼロであっても、人を喜ばせる創造的なアイデアに対価が支払われることに何らの不都合はないはずである。

第二に、^j馬を引き取ったところである。馬が息を吹き返したのは確かに幸運であったが、引き取る時点では倒れていて、死にそうであったということが見逃せない要点である。馬に慣れた武士が見放した馬であるから、馬が助からない可能性はあったはずで、しからば男もこれを考慮に入れて交換に応じたはずなのである。言い換えれば、男は馬が死ぬかもしれないというリスクごと馬を買って取ったのだ。すなわちこれは成功するかしないかわからない、リスクの大きい事業に投資をしたことと同じである。リスクをとってなされた投資の成果を、^kキョウジュすることと、労せず富を得ることには大きな差がある。

さて、ミカンと反物については、男は特段の工夫もなく右から左に取引しようとしたと見ることはできる。しかしこれも、何か特殊な出来事が起こったというわけではない。畑で採れた余ったミカンを街中までトラックで運び、道行く人に売ると本質的には同じことだ。ここでは、欲している人の元に物を動かすということは、それだけで立派な経済活動であるということが学ばれるべきなのである。つまり、運送業や小売業がなぜ我々の経済の中で大切な役割を占めているのかを説明する、格好の材料が提供されているのだ。

わらしべを持った男には、もちろん運もあった。しかしより大切なのは、男は他人を喜ばすという正当な経済活動を営んだからこそ、利益を積み上げて、^lフウキを得ることができたということだ。ここが「わらしべ長者」にて味わうべき点なのである。

思うに、「わらしべ長者」にある種の^mゲンオ感がともなう原因は、ⁿ特定の個人に話の焦点が当たっているためではないか。つまり、そのほかの人たちが、男

との取引の結果どれだけ豊かになったのかが書き込まれていないために、男だけ突出して幸運であり、何かあくどい事をしたかのように見えてしまうのだ。たとえば、わらしべを受け取った子供が、少年時代に体験したアブのおもちゃ遊びのアイディアをヒントにして、大人になって「カングメーカー」を立ち上げ、末は東証一部上場の大企業にまで成長するところまで話が続いていたら、わらしべ男の生き方を非難する人は少なからうと思う。

実際、我々はだれしも毎日「何らかの労力ををさいては、自分が作り出したものではないものを手に入れて、少しずつ利益を積み重ねるといふ、わらしべ長者的な生活を営んでいるのである。差があるとすれば、それは一度の取引で得られるもうけの程度と質にある。

Mこの点についても、わらしべ男が長者になるためにわずか四回の取引しか要さなかったのは、昔話は簡潔明瞭でなければならぬという制約の産物と見るべきであり、これをして彼が度を越した幸運の持ち主だとみなすべきではないと私は考える。もっと細かな取引を繰り返して利益を積み重ね、そして結果として一國一城の主になったとしたら、それはまさに地道な勤労の美德の結果として、賞賛されるべきことではないだろうか。

「わらしべ長者」は日本独特の話ではない。世界各国にそれに似た昔話があり、そこに経済学的な考え方の普遍性を私は感じるのである。私の特に好きなのはヒマラヤの国ブータンで語られる話だ。

ある男が畑を耕していたら、宝石が出てきた。すると宝石と馬を交換してほしいという人が現れたので、宝石に興味のなかった男は宝石を手放して馬を得た。次に馬が牛に代わり、そして羊になった。そのような取引を繰り返しているうちに、男の持っているものは鳥一羽になった。

すると、その鳥が欲しいけれども、交換するものが何もない。自分の知っている歌を一つ教えてあげるから、鳥をくれないかという人がいたので、男は喜んで鳥と歌を引き換えにした。そして男は歌を口ずさみつつ、幸せな顔をして立ち去って行った。

経済学の理屈では、この男も利益を得たはずだし、実際そうだろう。「こういう人物こそ、人生で本当に大きな利益を得られるものではないかと、私は思う。」

問 二重傍線部 a～h を、それぞれ漢字に直せ。 知

答 a 渴 b 介抱 c 潤 d 担 e 享受 f 富貴 g 嫌悪 h 玩具

問 傍線部 A とは、本文ではどのようなことか。最も適当なものを、次から選べ。 思

ア 「わらしべ長者」をキーワードにインターネット検索をしてみる

イ 「わらしべ長者」を真似して、実際に少ない元手で楽して大もうけすること

ウ 「わらしべ長者」の話を、少ない元手で楽して大もうけの話と解釈すること

エ 「わらしべ長者」のように、つまらないわらしべが最後には屋敷になること

オ 「わらしべ長者」の男が、観音さまのお告げを最初から最後まで信じていたこと

答 ウ

問 傍線部 B とあるが、本文で「価値」はどのように説明されているか。「〜ということ。」に続く語句を、本文中から二十字以内で抜き出して答えよ。 思

問 傍線部Cとは、どのような差を指しているか。簡潔に答えよ。思

〔答〕 交換前よりも交換後の状態の方が好ましい(ということ)。(19字)

問 傍線部Dとは、どのような原則か。本文中から十五字で抜き出せ。思

〔答〕 交換前と交換後の状態の差

問 傍線部Eのように言えるのはなぜか。最も適当なものを、次から選べ。思

〔答〕 自発的交換による価値創造の原則

ア 千円でわらしべを売り、その千円でミカンを買ったから。

イ 特定の取引では、価値が変動する貨幣は通用しないから。

ウ 貨幣が媒介しないと、取引が不完全なものになるから。

エ 物々交換の世の中も金銭を使う現代も同じ社会だから。

オ 重要なのは何らかの取引によって利益を得たことだから。

問 傍線部Fとあるが、何についての「本質」なのか。最も適当なものを、次から選べ。思

〔答〕 オ

ア 貨幣 イ 物々交換 ウ 金銭 エ 取引 オ わらしべ長者

〔答〕 エ

問 傍線部Gとあるが、「わらしべを持った男が屋敷を手にする」ために必要な条件を二点答えよ。思

〔答〕 登場する人々が直接に取引できる場がないという条件。／取引を媒介できる人物がわらしべを持った男だけという条件。

問 傍線部Hとは、どのようなものか。四十字以内で説明せよ。思

〔答〕 その場では取引できない人たちであっても、機会があれば得ることができるような利益。(40字)

問 傍線部I・Jが「経済活動」とされるのはなぜか。それぞれ二十字以上二十五字以内で説明せよ。思

〔答〕 I 人を喜ばせる創造的なおもちゃを生産したから。(22字) J リスクの大きい事業に対する投資と同じことだから。(24字)

ア 「わらしべ長者」の男の幸運だけが描かれていること

イ 「わらしべ長者」の登場人物だけ豊かになったこと

ウ 「わらしべ長者」という人物のあくどさが描かれていること

エ 「わらしべ長者」の男だけが正当な経済活動を学んだこと

オ 「わらしべ長者」の男の生き方が特にユニークだったこと

答 ア

問 傍線部Lは、本文中でどのように言い換えられているか。二字で答えよ。思

問 傍線部Mとは、どういう点か。最も適当なものを、次から選べ。思

答 取引

ア 我々は多少の差はあれ、だれしもわらしべ長者的な生活を営んでいる点

イ 一度の取引で得られるもうけの程度と質が毎日の何らかの労力に比例する点

ウ 「わらしべ長者」のような昔話は簡潔明瞭でなければならない制約がある点

エ 人によって一度の取引で得られるもうけの程度と質に差がある点

オ わらしべ男がわずかな取引で利益を得た幸運の持ち主だと賞賛される点

答 エ

問 筆者の主張に合致するものを、次から一つ選べ。思

ア 経済学的な原則に則った生活を送ることができれば幸福になることができる。

イ わらしべ長者は昔話であり、話を面白くするために四回の取引で富裕になった。

ウ 現実問題として経済的に豊かになるためにはある程度幸運である必要がある。

エ ブータンの話の男が利益を得るためには、経済学的な知識が必要であった。

オ 形はどうあれ、他人を喜ばすことで利益を得ることは正当な経済活動である。

答 オ

問 波線部1の表現から読み取れる筆者の考えを、次の条件に沿って百五十字程度で説明せよ。思

【条件1】筆者が述べる経済学的な考え方について言及すること。

【条件2】「本当に大きな利益を得られる」とはどういうことかを具体的に説明すること。

【答例】経済学的な考え方においては自発的な交換によって双方が幸福な状態になることが最も重要である。幸福な状態とは、大金持ちや大地主になることを指すのではない。幸福は、商品の客観的価値を考へることなどせず、自分にとって価値があるかどうかを判断基準として取引をした結果、得られたものを通して感じられるものである。(一五〇字)

*採点基準

①「自発的な交換によって双方が幸福な状態になる」という内容が書かれている。②「自分にとって価値があるかどうか」に言及できている。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

親族を形成するのも、言葉を交わすのも、財貨を交換するのも、総じてコミュニケーションとは「価値あるもの」を創出するための営みです。ことの順序を間違えないでください。「価値あるもの」があらかじめ自存しており、所有者がしかるべき返礼を期待して他者にそれを贈与するものではありません。受け取ったものについて「返礼義務を感じる人」が出現したときにはじめて価値が生成するのです。「価値あるもの」を与えたり受け取ったりするわけではないのです。ひとりの人間が返礼義務を感じたことによって、受け取ったものが価値あるものとして事後的に立ち上がる。「僕たちの住む世界はどのように構造化されています。経済学の本には、人類最初の経済活動は「沈黙交易」であったと書いてあります。沈黙交易というのは、見知らぬ部族同士が、それぞれのテリトリーの境界線上で、顔を合わせるこなしに、特産物のやりとりをすることです。

境界線上にある巨石の上とか巨木の下とか、ランドマークのところ^{どころ}に一方の部族が自分たちの特産物を置く。それを受け取った他方の部族が自分たちの部族の特産物を置いて返礼をする。その繰り返しから交易活動が始まる。

経済活動の本質がここにははつきり書き込まれています。それはA交易は等価交換ではないということ^{どころ}です。この両部族は価値の度量衡を共有していないからです。こちらの部族が珍重するものの価値が他の部族には理解できない。その価値観の非同^{どうごう}一性がなければ、そもそも交換は始まりません。だから、沈黙交易において、交易の場に置かれるものはできるだけ「価値のわからないもの」でなければならぬ。「価値のわかるもの」だと、受け取った側がその等価物を置いたところ^{ところ}で交易は終わってしまうからです。

だから、「これはいつたいたいなんだろう？」と何に使うものだろうか？と思案投げ首するようなものが最良の交易品となります。

交易を終わらせないための最良の贈り物は「相手にはすぐにはその価値がわからないもの」です。では、手元にあるもの^{もの}のうちで、「交易相手にすぐにはその価値がわからないもの」という条件をもっとも確実に満たすものはなんでしょう。考えればわかります。それは「自分が別の交易相手からもらったのだが、自分にはその価値がわからないもの」です。（中略）

他者から贈与されるものは、「それがなんだかよくわからないもの」であることが多い。これこそ、贈与のサイクルが始まるために必須の、ほとんど死活的な条件であると思えます。というのは、そうであれば、何を見ても、「これはもしかすると私宛ての贈り物ではないか？」と考えることができるからです。

「沈黙交易」が始まった、その起源の瞬間を想像してみてください。ある日歩いていたら、自分たちのテリトリーのはずれに、「何か見知らぬもの」が置いてあった。人工物でもいいし、自然物でもいい。とにかく「ふつうはそこにはないもの」があった。それを隣人からの「贈り物」だと思ったことから沈黙交易は始まった。たぶんそういうことだと思えます。

でも、これを「贈り物」だと思ったのはもしかすると早とちりだったのかもしれない。隣の部族の人が「要らない」と思って棄てていったものかもしれない。風や水に運ばれて、あるいは他の動物が啜^くえて持ってきたものがたまたまそこに転がっていただけなのかもしれない。でも、それを「自分宛ての贈り物ではない

か」と思った人がいた。そして、返礼義務を感じた。すべてはそこから始まった。

「価値あるもの」がまずあったのでもないし、「誰かにこれを贈与しよう」という愛他的な意図がまずあったのでもない。たまたま手にしたものを「私宛ての贈り物」だとみなし、それに対する返礼義務を感じた人間が出現することによって贈与のサイクルは起動した。人間的制度の起源にあるのは「これは私宛ての贈り物だ」という一方的な宣言なのです。おそらく、その宣言をなしうる能力が人間的諸制度のすべてを義務づけている。ですから、端的に言えば、何かを見たとき、根拠もなしに、「これは私宛ての贈り物だ」と宣言できる能力のことを「人間性」と呼んでもいいと僕は思います。

『街場のメディア論』内田樹

問 傍線部Aについて、「交易」とは、どのようなことだと筆者は言っているか。「交易とは、……ことである。」という文になるように、「……」の部分について、

「価値」という語を用いて、三十字以内で説明せよ。思

答 自分にとっても相手にとっても価値がわからないものを交換する（29字）

問 波線部1について、『わらしべ長者』の経済学の内容を踏まえて説明したものととして最も適当なものを、次から選べ。思

- ア 交換によって双方が幸福になることが重要であり、交換前においては双方の幸福度に一致は見られない世界。
- イ 経済学の基本原則にあるように、価値のあるものと価値のないものとを交換することを前提にしている世界。
- ウ 交換によって自分の目的にかなった利益を得られることが見込めなければ、交換に合意しなくてもよい世界。
- エ 交換するものの客観的価値が不明でも、交換を通して取引に関わった人たちが利益を得ることができる世界。
- オ 取引をする人たちが、そろって共通に取引できる場がなく、お互いに価値観をすりあわせる機会がない世界。

答
エ